

## 海外出張報告書

2013年 3月 25日提出

氏名	宮園 耕介
所属	獣医学研究科 臨床分子生物学教室
学年	博士課程 2年
出張先	アメリカ (カリフォルニア大学デービス校、コーネル大学)
出張期間	2013年 3月 3日～11日
目的	シェルター施設見学ならびに各大学の診断施設、動物病院見学

### 活動内容

去る3月3日、ひな祭りの日の午前中、札幌は前日から続く暴風雪により多くの交通機関が麻痺していました。当初の予定を変更しながらも、無事に成田空港へと到着し、アメリカ、サンフランシスコ空港へと約9時間のフライトとなりました。その後、サンフランシスコから陸路でカリフォルニア州デービス市へと移動し、2日間の施設訪問を行いました。デービス市は札幌の気候とはうって変わり、非常に温暖な気候で、街路樹の桜やこぶしの花がちょうど咲いている頃でした。

デービス市に到着したその日に UC デービスに所属されている田中亜紀先生とお会いし、翌日には先生の専門である **shelter medicine** について実際にシェルター施設を訪問してご説明いただきました。日本では耳慣れない **Shelter medicine** という分野ですが、近年アメリカにおいて発展しつつある獣医学分野の一つであり、これまでの小動物の個体での管理に対して、群における健康の向



図 1. シェルター施設内の猫舎の見学

上、感染症や繁殖の管理を目的とする学問です。この **shelter medicine** についての知識が活用され運営されているのが、今回訪問したシェルター施設でした。シェルター施設とは行き場を失った動物が一時的に保護される施設であり、犬や猫、ウサギなどが、受け入れ先が見つかるまでの一定期間そこで生活しています。動物の出入りの激しいシェルターにおいて、群単位で感染症への対策、収容動物のストレスの軽減などの管理を行うことは、健康の向上ひいてはシェルターの動物達が譲渡されやすくなるという利点につながります。これら、疾病の管理の他にも、今回訪問したシェルターにおいては、動物たちの引受先がより早く、多く見つかるように様々な工夫がなされ

ていました。収容された動物は、年齢にかかわらず、すぐにワクチン接種、避妊手術がなされ、すぐに引受先が見つかって対応できるようにされており、動物を探して見にこられた方たちへの印象が良いように、動物達のヘアカットなどが行われていました。日本においてはまだ、馴染みのない学問分野でしたが、アメリカでこの **shelter medicine** への関心が高まったのは、アメリカ本土を襲ったハリケーンにより、行き場を失った動物たちが多数出現したことに端を発しているとお話がありました。日本も、これまで多くの自然災害に被災し、その過程で多くの動物が住みかを失い保護された事と思います。現在、自然災害への対策が進む中で、これらの動物の健康をより高い水準で保持してゆくためにも、今後 **shelter medicine** という領域は日本においても、発展してゆくのではないかと感じました。

デービス滞在3日目にはUCデービスの獣医学部に併設された診断施設ならびに動物病院を見学させて頂きました。どちらの施設でも、その高い専門性を感じました。診断施設においては組織、病理、微生物、毒性の専門家たちがそれぞれの分野で迅速に診断を下し、時には異なる分野とのディスカッションを行って正確な結果を導いていました。動物病院では、細分化された診療科ごとに専門医が診察に当たっており、放射線治療や動物用の透析施設など日本ではあまり目にする機会のない施設を見学することができました。



図2. 診断施設の見学

翌日は次の目的地であるニューヨーク州イサカ市への移動日でしたが、ここでも天候のために予定を変更し、乗り継ぎ途中のニューアークにて1泊することとなりました。翌日の3月7日、陸路でイサカ市に到着しました。イサカ市の気候は札幌に近く、まだ町中に雪が残っていました。また、町には坂が多く、目的地であるイサカ大学は坂を上った先に位置していました。イサカ到着当日が遅れたために、その日は大学の見学ができず、翌日3月8日のみの見学となりました。その際にはコーネル大学での見学をコーディネートしていただいた向井先生に、急遽日程調整をしていただき、スムーズに翌日からの見学を行うことができました。コーネル大学では午前

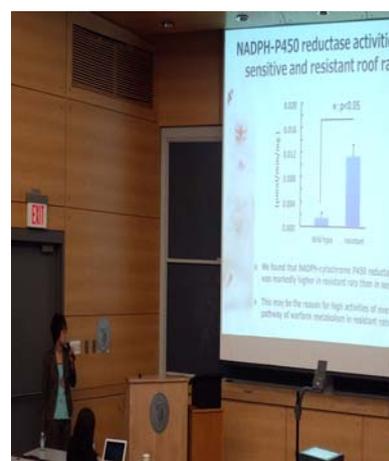


図3. コーネル大学にて発表を行う石塚教授

中に、本学毒性学教室の石塚先生、帯広畜産大学の川本先生の英語での講演を聴き、午後からは病理解剖の症例検討会を見学した後に診断ラボならびに動物病院の見学を行いました。症例検討会では、リアルタイムで症例の諸臓器、患部等をスクリーンに映しながら所見を説明しており、活発な討議がなされていました。翌3月9日にイサカを出発し、予定通りであれば10日の夜には札幌に到着する予定でしたが、この帰路においても予定が変更となりました。間に陸路での長距離の移動を挟み、本来の航路とは異なる経路で日本へと帰り、札幌へ到着したのは3月11日の午前中になりました。

今回の研修を通じて、アメリカでの獣医学の役割やその発展を実際に見学できたことは非常に有意義であったと感じています。またそれ以上に、獣医療の現場で働く方々と拙いながらも英語でコミュニケーションをとりながらお話をうかがえたことが、私にとって非常に刺激となりました。予定が変更になることが何度もありましたが、そのような不測の事態を体験できたことも貴重な経験であったと感じています。

我々学生は先生方の後ろをついて行くだけでしたが、度重なる変更に対処していた先生方は非常に大変だったと思います。先生方が『研究者はタフでないとやっていけない』とおっしゃっていた意味を実感できた1週間でした。引率して頂いた本学ならびに帯広畜産大学の先生方にこの場を借りて感謝を申し上げます。